

令和 7 年度

「恵み野中央公園を育む会」
ワークショップ報告書

令和 7 年 12 月

恵 庭 市

目 次

1. ワークショップ開催の目的	1
2. ワークショップ概要	3
2-1 ワークショップ参加者の選定	3
2-2 第1回ワークショップ	3
2-3 第2回ワークショップ	10
2-4 第3回ワークショップ	19

1. ワークショップ開催の目的

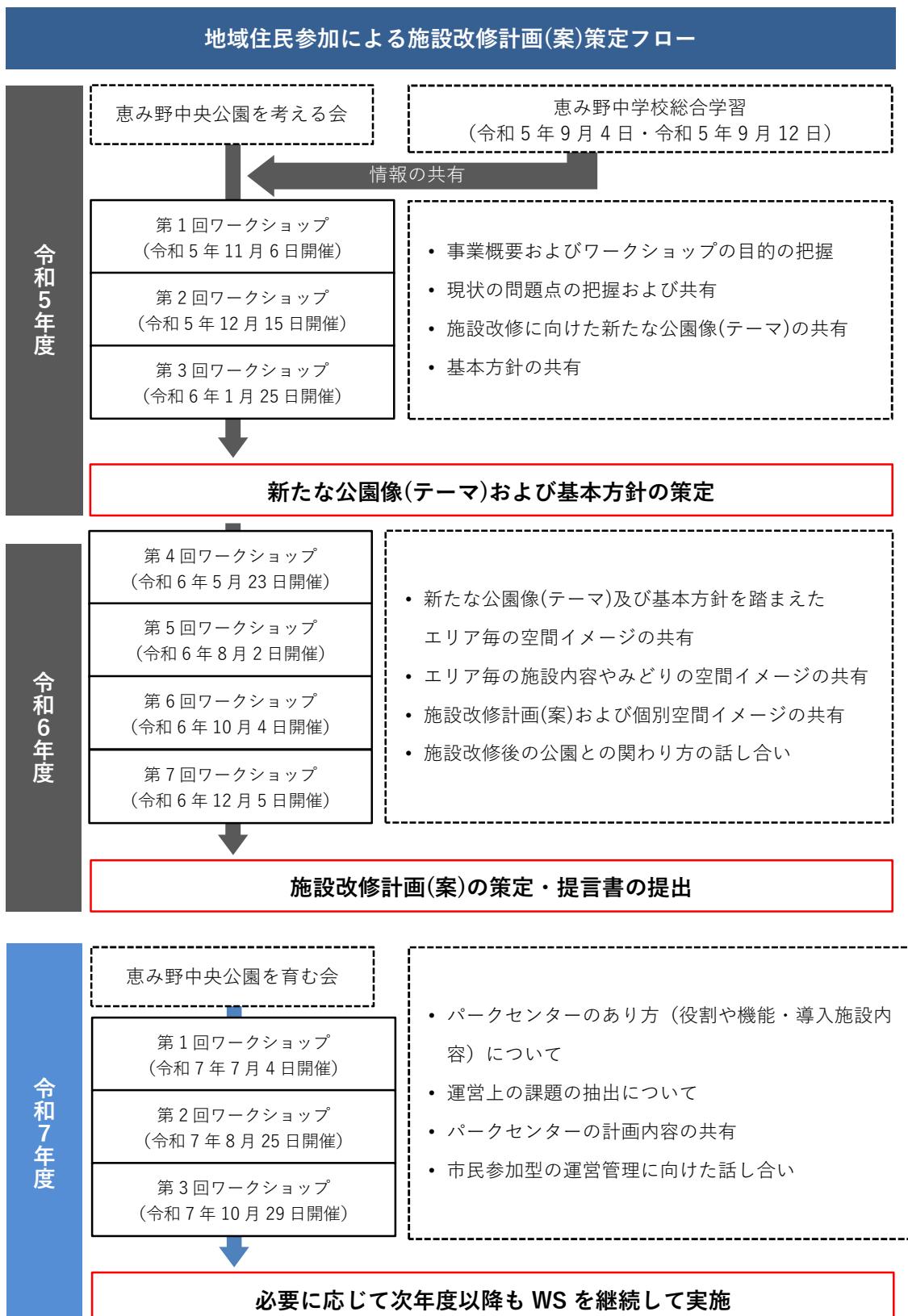
恵み野中央公園は、開設から約 40 年が経過し、施設の老朽化が進むほか、社会環境の変化により公園利用者ニーズと公園機能に不整合が生じるなど、多くの問題や課題を抱えています。

このような状況を受け、2023 年度(令和 5 年度)及び 2024 年度（令和 6 年度）に、地域で学び、働き、暮らす様々な立場の方々で構成される「恵み野中央公園を考える会」にて、本公園の魅力を再認識するとともに、これからの中公園のあり方についてワークショップ形式による議論や共有を重ねながら、施設改修に向けた新たな公園像(テーマ)や基本方針が整理されました。

2025 年度（令和 7 年度）は、昨年度までに整理された計画内容を踏まえ、より親しまれる公園として市民との協創による運営管理を考える「恵み野中央公園を育む会」を発足し、恵み野中央公園の中核施設となるパークセンターのあり方及び市内の核となる公園との連携・ネットワーク化を見据えた市民共創による運営管理の可能性についてなど、利活用や運営管理のソフト面について話し合いを行うことを目的として、計 3 回のワークショップを開催いたしました。

ワークショップの開催フローを下図に示す。

図表 1-1 ワークショップ開催フロー



2. ワークショップ概要

2-1 ワークショップ参加者の選定

本ワークショップの参加者は、2024年度(令和6年度)のワークショップに参加された方々を中心としつつ、新たに恵庭市で広域な地域活動をされている方々に参加いただきました。

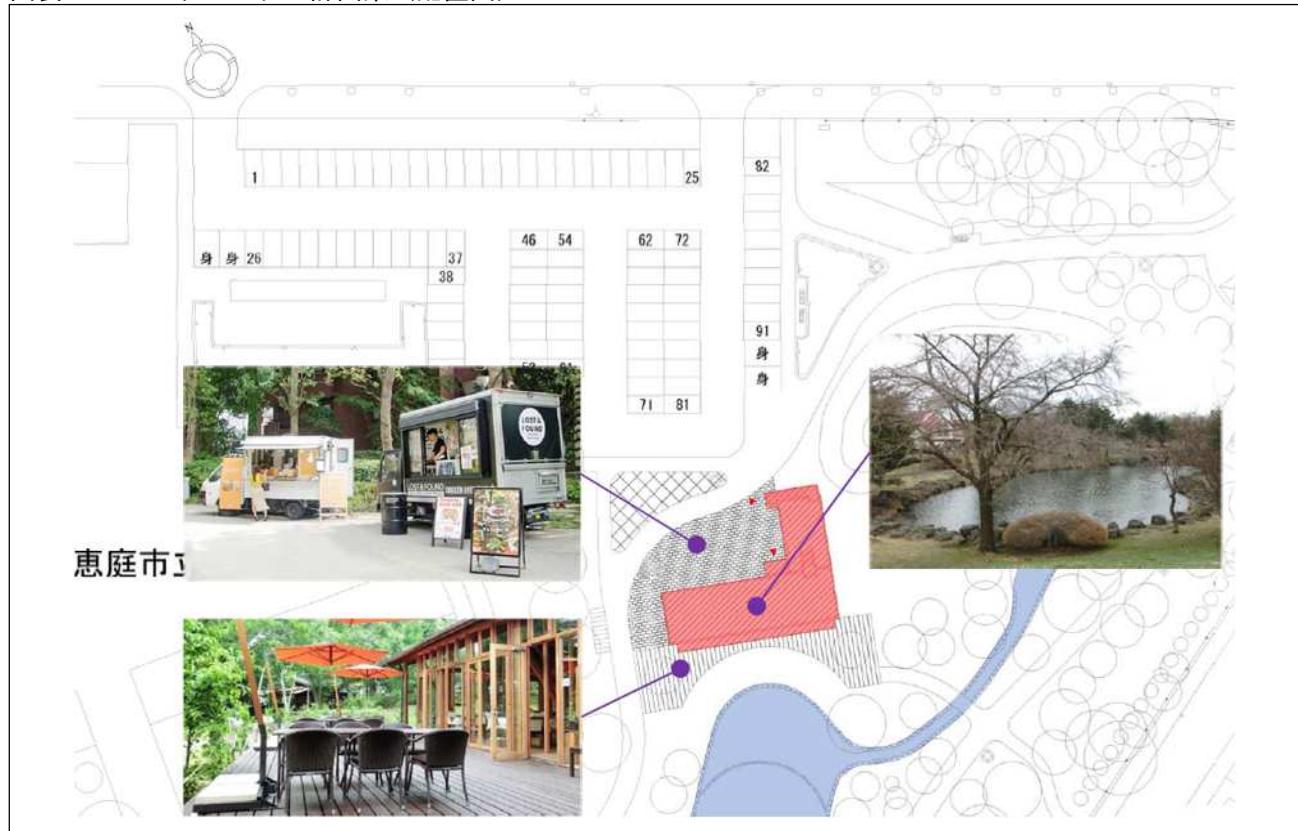
2-2 第1回ワークショップ

図表 2-2 第1回ワークショップ概要

第1回ワークショップ	
開催日時	令和7年7月4日 10:00～12:00(2時間)
開催場所	恵庭リサーチ・ビジネスパークセンタービル
参加人数	恵庭市役所：5名 環境緑地研究所：4名 ワークショップ参加者：18名 傍聴者：数名
開催目的	・パークセンターのあり方（役割や機能・導入施設内容）について ・運営上の課題の抽出について
提示資料	・しおり (開催目的、改修スケジュール、パークセンター計画案) ・昨年度までのふりかえり資料

第1回ワークショップでは、昨年度までの振り返りと、新たな議題であるパークセンターのあり方について及び運営上の課題の抽出話し合うための議論のポイントについて説明を行い、各グループによるパークセンターのあり方、運営及び間取りなどの計画内容について話し合いを行いました。

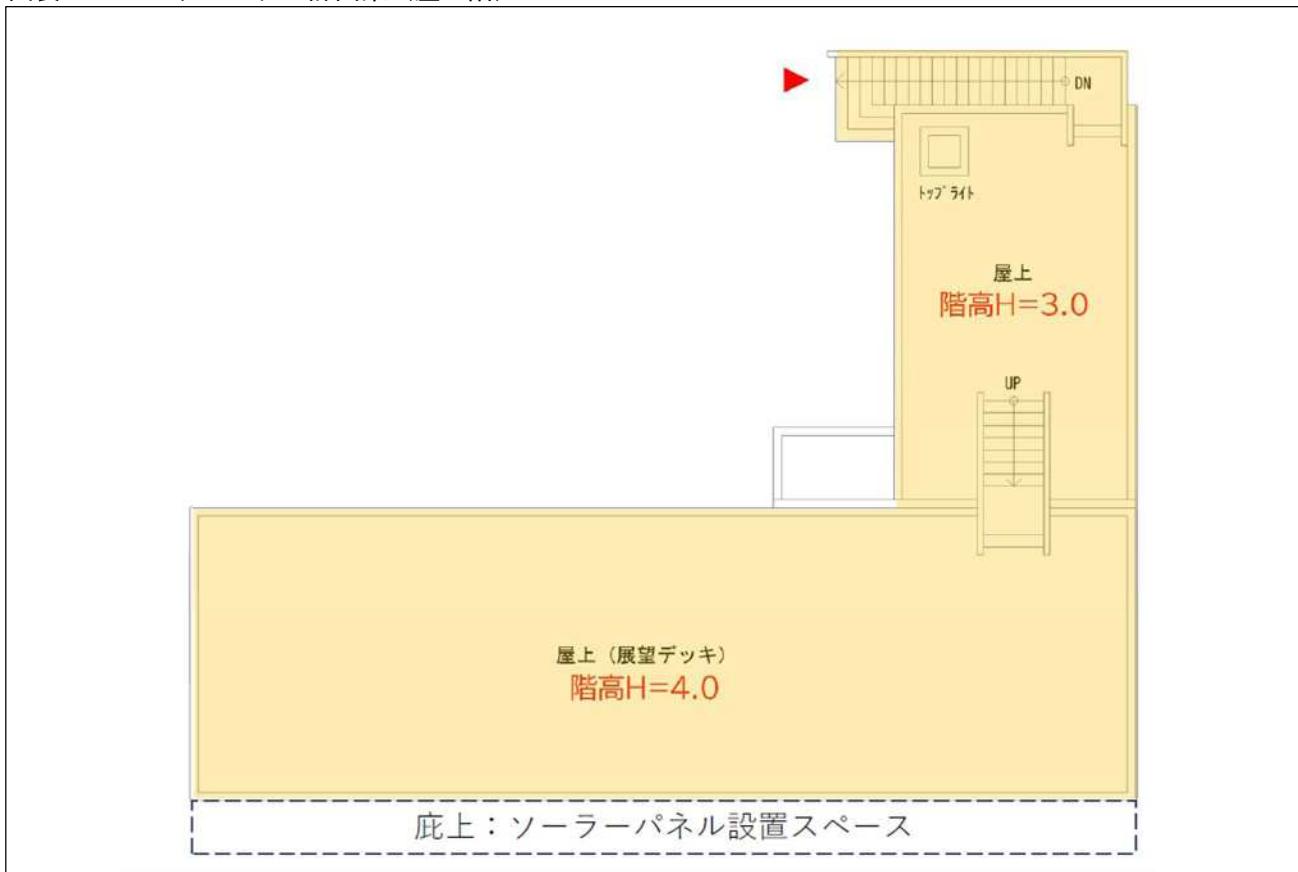
図表 2-3 パークセンター計画案（配置図）



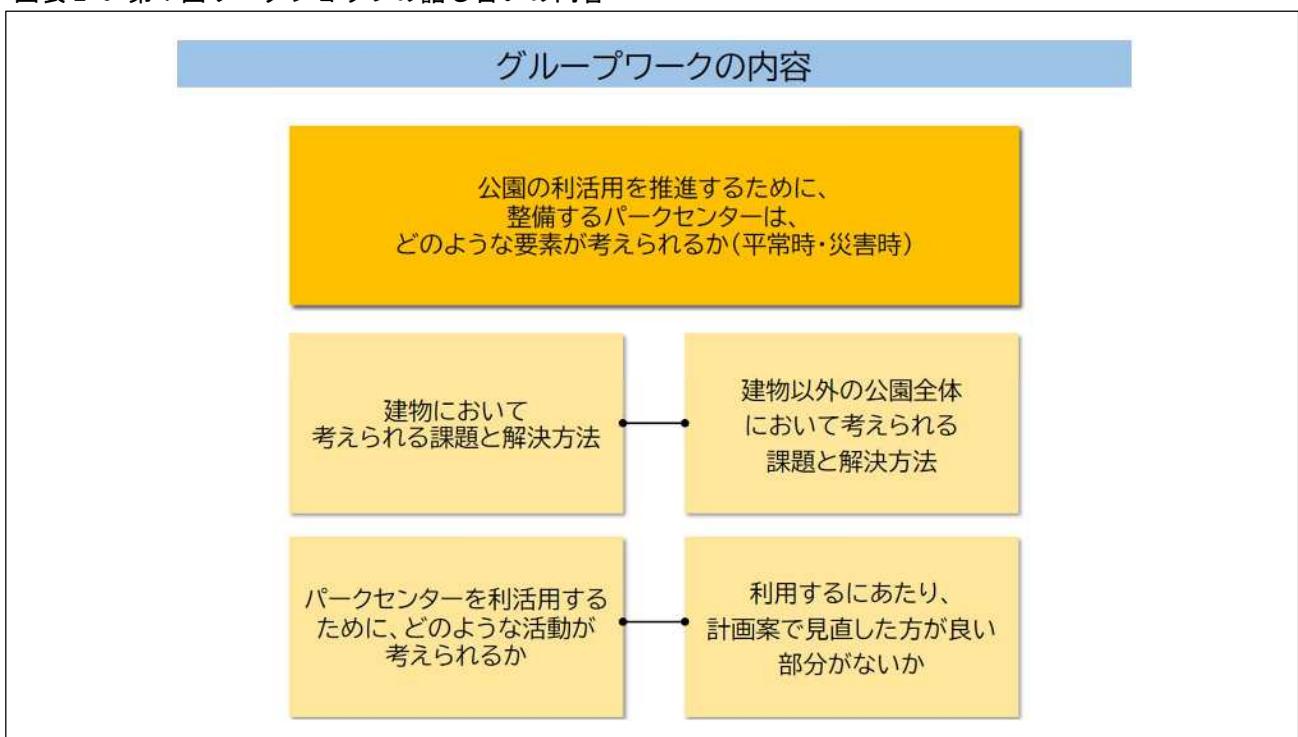
図表 2-4 パークセンター計画案（1階平面図）



図表 2-5 パークセンター計画案（屋上階）



図表 2-6 第1回ワークショップの話し合いの内容



第1回ワークショップで挙げられた主な意見について以下に示す。

【A班：6名】

《施設》

- ・ 多様の機能があることがこの公園の魅力
- ・ パークセンターの場所については駐車場からも近く、公園全体の中心的場所でよい
- ・ イベントなど開催時、音響、映像スクリーン等の設備があるとよい
- ・ トイレが24時間使えるのはよい
- ・ バリアフリーな施設であること（利用者は様々な人々、社会福祉の方等が集まる場、高齢者や障害者も使える施設）
- ・ 野鳥観察では、スコープ（望遠鏡）があるとよい、据付けタイプでよい（可動タイプだと盗難の恐れがある）。貸出名簿を書いてもらうか、有償も考えられる。飛ぶシマエナガなど観察もしたい
- ・ この場所が様々な人に使われゆっくり過ごせるようになるとよい
- ・ 犬の散歩に来ている人も多く、休憩時にリードを固定するものがあるとよい
- ・ 公園で活動を行ったグループが、終了後の話し合いや集合、ミーティングなど、無料で使える場所があるとよい（ふるさと公園はカフェなので有料となり毎回はお金が掛かり厳しい）。屋上にテント等があるとミーティングの場として無料で使える場となるのではないか

《屋上》

- ・ 屋上的一部に屋根があるとよい、固定的なものでなくてもよいので、仮設（テント地や）のシェード、折り畳み式でもよい
- ・ 屋上のデッキ、一部でも屋根（仮設シェード）でもあればルーフトップの施設として使える（近年、都市のビルなどルーフトップバーなどあり利用空間としても一部有料の施設も考えられる）
- ・ 屋上イベントなど有料貸出も考えられる
- ・ 内部階段、外部階段どちらも考えられるが、外部階段では除雪を考えることが重要
- ・ 屋上への夜間の進入対策についてコントロールが必要（若者たちが上がって喫煙など）

《運営》

- ・ 事務所管理を市民だけでは難しい
- ・ 中間支援団体、ハードとソフト、様々な人と人をつなぐ組織が重要
- ・ オープンは、土日なのか一週間なのか。維持運営費はどうするか。休み無しだと施設管理、人件費もかかる（場合によっては休日を作り、利用状況、費用をみて営業日を増やすのもありでは）
- ・ 公園はパブリックの場なので、民間や管理組織が私物化しないように気を付ける必要がある。管理面でルール作りも重要
- ・ 動線計画が大切。駐車場は図書館との共有の動線、内部の動線、外への動線など検討必要
- ・ どのように運営するかは予算、維持管理費を誰が出すのか、いくら位かかるのかが分からないと、運営組織や人材の検討は難しい
- ・ 周辺小学校などの学校との連携や、隣接する図書館との連携が大切

《お金を稼げる公園》

- ・ 市民が参加し運営するにも運営費をどうするか
- ・ パークセンターの各部屋などは有料か無料か。イベント時と日常時など場所（室）、使い方でのルール、価格の設定が必要（例えば、外での活動が終わった後、ホールに入りミーティングは有料にするか無料にするか。ホールで個人的利用は無料、会議室での会議、打合せは有料など）
- ・ 持続可能な運営をするにはお金もかかる、お金を落としてもらえる施設、仕組みが必要
- ・ 自らお金を気持ち良く払いたくなる仕組み、有料の仕組みや募金をしたくなる仕組み（例えばトレビの泉的、恵み野の泉を設け、泉で願いが叶うといった仕掛け）
- ・ 泉の形状や設えは、全国デザインコンペなどでよい案を集め
- ・ 恵み野は花のまち、恵み野中央公園がその中心、聖地化することで、価値を高め、泉へ…市内だけじゃなく、他市町村からの来園者を見込む（※ただし、公園や恵み野のルール等を理解し利用して頂く）

- ・ホール、集会室など利用料金について、平常時（イベント貸し切り以外）ホールや集会室は無料で使いたい、特にホールは施設の入口部として活用したい
- ・キッチンカーなどは出店料を徴収し、維持管理費に充てる

【B班：6名】

《人材》

- ・現状ではノウハウがないため、中間支援組織の必要性を感じる
- ・パークコーディネーターの設置が望ましい
- ・維持管理と企画管理まとめて委託するのは限界があるので分けた方がよい（どちらも中途半端になってしまう）
- ・えこりん村は花管理とマーケティングで管理、運営を分けている
- ・恵み野中央公園の活動を紹介するコーナーを設け、活動内容の周知を行いたい

《集客》

- ・エリアごとに人を呼べるコンテンツがあるとよい。公園を利活用するためには人に来てもらう仕掛けを用意する必要がある
- ・平日は散歩利用や子連れの親子、休日は家族や学生と、対象者が異なるので、それに対応したイベントを実施する必要がある
- ・パークセンターに遊具機能を設け、遊びの一環として利用する（屋上からすべり台など）

《周知方法》

- ・ボランティアの参加を決められた時間内ではなく、気の向くままに自由参加できるような活動が望ましい。まとまった時間は取れなくても、隙間時間で作業できる人もいる
- ・恵み野中央公園を起点にしたボランティア活動の実施や花ふるを活動拠点として恵庭市全体に広げていく方法も考えられる

《要素・仕組みづくり》

- ・管理人に事前に伺いを立ててイベントを実施するようなシステムではなく、もっと気軽に簡単に自由な活動ができたらよい
- ・自由に誰でも参加できるような仕組みづくりが必要
- ・ボランティア用の個人ロッカーのような場所があつてもよい。パークセンターを活動拠点として活用したい。詰所は離れているので、このような機能を詰所に設けるのは好ましくない
- ・図書館との連携（屋上を利用させてもらう等）
- ・本を借りてパークセンターで読むような利用方法も考えたい
- ・夜の利用方法として、池にホタルがいれば楽しめる。生息していてもよい環境であるため、繁殖活動でホタルを池に呼び込めないか
- ・パークセンターでは、習い事や教室、休憩や撮影、子どもの場所等として使えるとよい
- ・ガラス面が透明だとバードストライクのリスクあり
- ・月寒公園のようにパークセンターの傍に、ボランティアで集めたごみ袋等の仮置きスペースがあるとよい。月寒公園では、フェンスで囲っているため周りからは見えないようになっている。この場所は公に知られておらず、ボランティア参加者のみが知っている場所として利用している
- ・プレーパーク利用者への配慮が必要
- ・太陽光発電はあり当たりなため、地熱利用等の技術も活用できないか

【C班：6名】**《組織作り》**

- ・ イベントなどをとりまとめる役割は誰が行うか
- ・ イベントの開催などをNPO、個人として参加することは可能

《役割》

- ・ コンシェルジュやコーディネーターの設置が必要。可能であれば常駐がよい
- ・ はなぶる方式を参考に、管理者と市民、NPO、関係団体が協働運営

《機能》

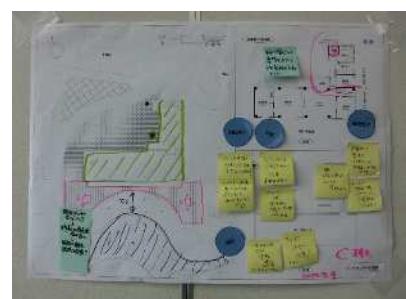
- ・ 一次避難所としての情報発信は、誰が管理して誰が使うのかといった問題点や課題あり
- ・ キッチンコーナーを設置した方がよいと思うが、管理と使用者の問題点や課題あり

《維持管理》

- ・ 建築物の管理は、ボランティアではなく、仕事としての管理者でなくては務まらない
- ・ 公園施設についての管理はどうするか。例えば、公園内の野球場やテニスコートの管理は誰が行うか

《その他》

- ・ 親水デッキをセットバックさせるということは、野鳥の優先順位が高いということか。当初の親水機能を放棄するということか
- ・ 授乳室は男親がおむつ替えを行う場としても使用できるように2部屋に分けた方がよい
- ・ 授乳室は現計画の半分程度でもよい

各班の話し合いと発表の様子

○第1回ワークショップのまとめ

第1回ワークショップでは、昨年度までの振り返り及びパークセンターの計画案を提示し、運営や管理方法、活用方法などについて活発な話し合いが行われた。

商店会やフラワーマスター協議会、教育関係者など、それぞれの立場における見方や考え方について様々なアイデアが提示され、今後のパークセンターのあり方を考える際の大きな参考となった。

パークセンターの運営においては、行政や市民単体による運営管理には限界があり、中間支援組織の導入検討が必要との共通意見が挙げられた。

計画案については概ね参加者の共有が図られた。

上記を踏まえ次回のワークショップでは、関東圏で中間支援組織（パークコーディネーター）として都市公園の指定管理事業を担っている事業者を招き、具体的な事例紹介やノウハウについて講義いただき、恵庭スタイルを模索するヒントとして活かす。また、パークセンターの計画案については、外観イメージや設備計画などのより詳細な仕様について提示し、その内容について共有する。

2-3 第2回ワークショップ

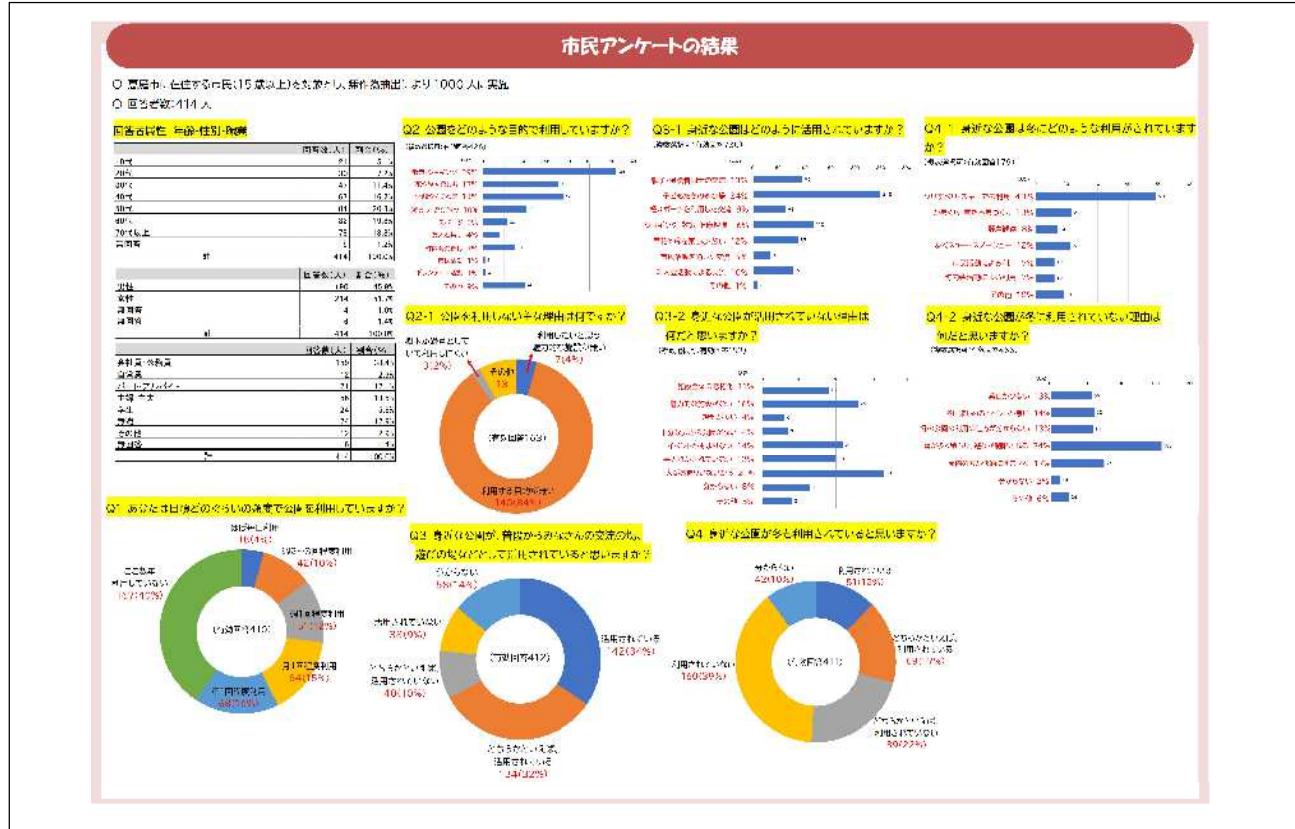
図表 2-7 第2回ワークショップ概要

第2回ワークショップ	
開催日時	令和7年8月25日 14:00～16:30(2.5時間)
開催場所	恵庭市民会館
参加人数	恵庭市役所：5名 環境緑地研究所：4名 ワークショップ参加者：19名 傍聴者：数名
開催目的	・市民参加型の運営管理に向けて①
提示資料	<ul style="list-style-type: none"> ・しおり (開催目的、改修スケジュール、前回のふりかえり) ・しおり別紙(市民アンケートの結果)

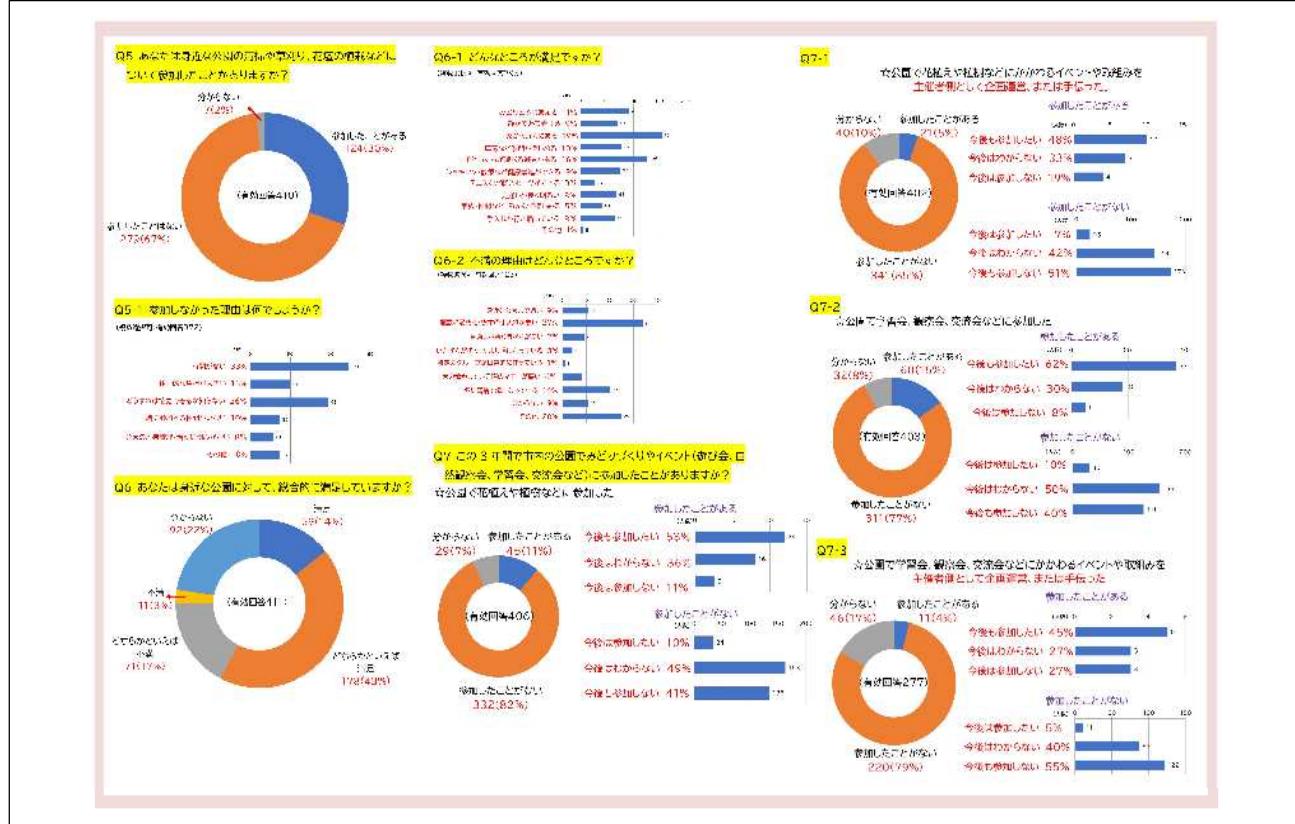
第2回ワークショップでは、第1回ワークショップの振り返りと、恵庭市民1,000人を対象とした市民アンケートの結果報告の他、東京都を中心に中間支援組織として活動している特定非営利活動法人NPObirth佐藤氏を招き、市民との協創による運営管理やパークコーディネーターの育成についてご講演いただきました。

その後、各グループにて市民参加型の運営管理に向けて話し合いを行いました。

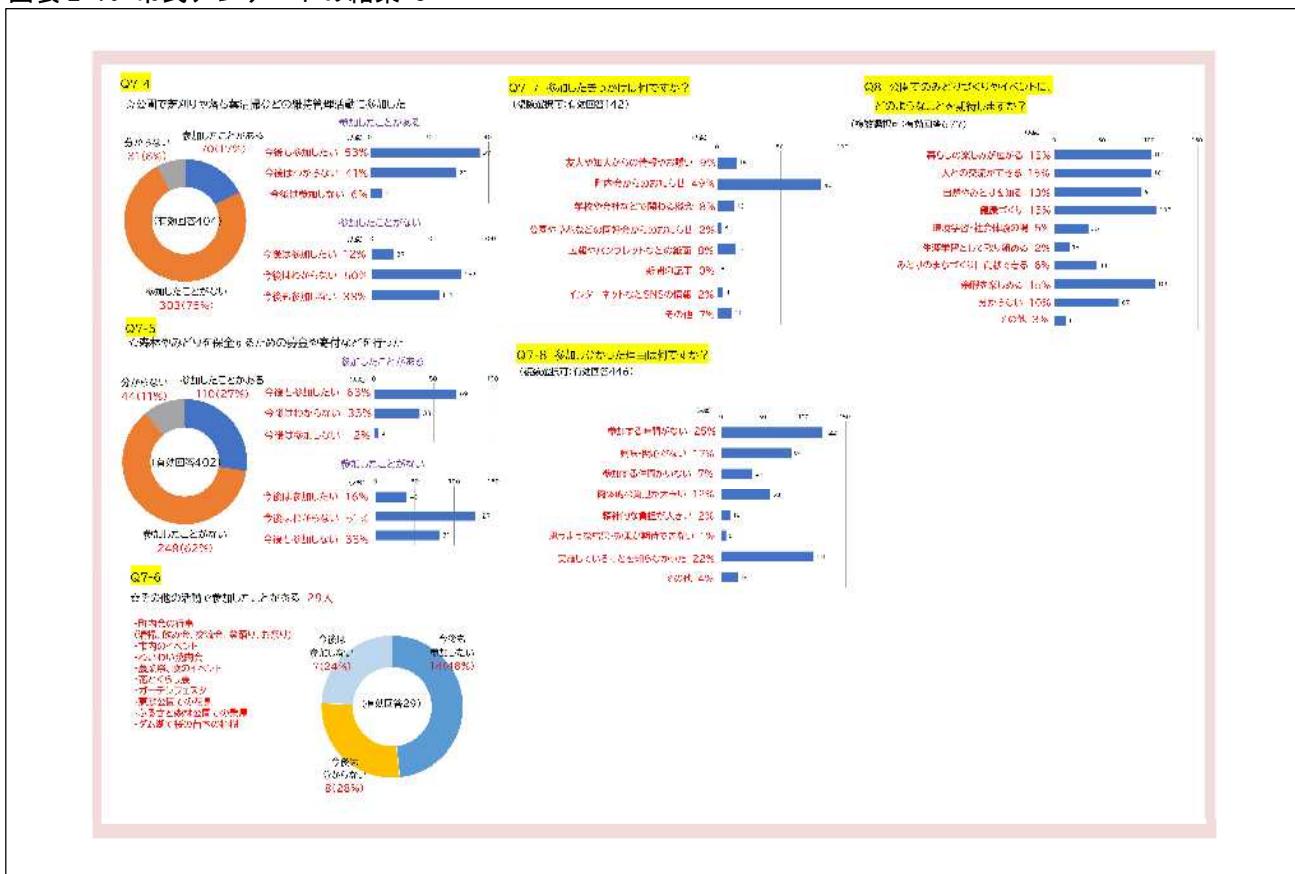
図表 2-8 市民アンケートの結果-1



図表 2-9 市民アンケートの結果-2



図表 2-10 市民アンケートの結果-3



図表 2-11 第 2 回ワークショップの話し合いの内容

④ 本日の話し合いの内容について

市民アンケートの結果や、市民協創による運営管理の先進事例を参考しながら、より掘り下げてパークセンターの運営管理の方法について、話し合いを進めていきます。

話し合いのテーマ例として…

- ・持続可能な運営管理の体制はどう考える？
- ・人材の育成と運営ノウハウの構築はどう考える？
- ・行政支援は何が必要？
- ・無理のない運営・活動を継続するための“恵庭スタイル”とは？

NPO birth 佐藤氏による講義内容

『パークポジティブ』～公園と地域の力を引き出すみどりの中間支援組織～

- ・ みどりの中間支援組織の役割は、“みどり”と“ひと”と“まち”を繋ぐ役割を持ち、公園のまちづくりに活かすこと。-Well-beingなまちづくり-
- ・ 公園は非常に大きな力がある。環境問題だけではなく、少子高齢化や貧困、健康、ワークライフバランスなどの社会課題を公園が解決する場として機能する。
- ・ これまで公園は国交省が管轄しており、道路と同じような感覚で、安全に市民に使ってもらうということで公園があった。今は公園から考えるまちづくりの場、という考え方へ変わってきていている。まちづくりを考えるには、今までと違った新しい仕組みが必要で、新しい担い手も必要。ボランティアの活躍や最近ではパーク PFI という取組も広がっている。
- ・ SDGs の観点では、公園緑地が活用されると環境面においては地域生態系を育むことができる。社会面ではコミュニティ活動が活性化する。経済面では地域経済が活性化する。それらの軸として協働・連携する役割を中間支援組織が行っている。
- ・ NPO birth は、「公園力」公園を育み、高め、社会やライフスタイルの変革をリードすることを行行動指針としている。産官学民いろいろな方々と一緒に活動することで、自分も守られ地域のコミュニティも活性化する。
- ・ 専門のパークコーディネータースタッフが、地域ニーズを拾う“アウトリーチ”を行い、テーマに共鳴した人や団体を繋ぐ“マッチング”をし、企画の実現に向けて“コーディネート”する。連携の要となる役割を果たすことで、あつたらいいなを実現する。
- ・ 公園をまちづくりに活かすためには、公園の特性だけではなく、地域の特性を把握する必要がある。地域の産官学民の方々と公園づくりの方向性について考える。これまでの維持管理中心の管理から運営管理のソフトも含めて考えることが非常に大事。

中間支援組織が携わるパークマネジメント事例紹介

- ・ 中間支援組織が指定管理者の一員「東京都建設局都立 17 公園」
民間で公園を管理している中に中間支援組織として参入。
- ・ 中間支援組織が指定管理者の一員で市民協働型「西東京いこいの森公園と 54 公園」
行政のみどり公園課の中に市民協働担当が設置されており、パークコーディネーターと連携して市民の要望を聴き取りながら行っていく仕組み。
- ・ 中間支援組織が指定管理者の一員かつ人材育成「守口市立よつば未来公園」
地域連携が弱いという課題があり、外部から別の団体のパークコーディネーターの育成をサポートする立場で関与。
- ・ 中間支援組織が地域連携事業を受託「大田区立田園調布せせらぎ公園」
指定管理業務は受けていないが、外部から地域連携事業のサポートを行う立場で関与。
- ・ 中間支援組織が指定管理者のアドバイザー契約「仙台市立青葉山公園」
- ・ 指定管理業務は受けていないが、アドバイザー契約を結んで職員の研修や、地域連携の企画運営業務をサポートする立場で関与。
- ・ 「静岡市あさはた緑地」は元々中間支援組織という仕組みはなかった。グリーンパークあさはたは、ローカル SDGs ネットワークを代表として、地元団体であるしづおか環境教育研究会と、造園のネットワークを広く持つ造園緑化協会で構成された団体。



第2回ワークショップで挙げられた主な意見について以下に示す。

【A班：6名】

《恵み野中央公園再整備の考え方》

- ・ “はなぶる”との差別化を考える必要があり、恵み野中央公園においては、賑やかなイベントの場ではなく、「学びの場」として考えたい。地域住民の学びの場として色々な勉強（考え、相談）ができる場。
- ・ バリアフリーな整備は必要。
- ・ 恵み野らしい文化、暮らし方を現実化する場として考えたい。
- ・ 公園の特長を活かせる活用、公園に行く理由、魅力を表す場。
- ・ 公園の活用方法を地域や利用者からアイデアを募集して実践してみたり、学生だけでなく高齢者も学べるような内容、高齢化社会に特化、対応した公園。

《持続可能な運営管理 “体制”、“機能”》

- ・ 中間支援組織を導入したとして、何ができるようになるか。現状では、音を出したり、何かをすることに対してクレームが多く、色々制限がありすぎる場になっている。
- ・ 過去に行っていた音楽会は、派手な音ではなく、落ち着いた音ならできるはず。
- ・ 現状の管理は、指定管理者が公園を綺麗にすることをメインに行っている。これからは、公園をもっと楽しく、魅力のある運営や使い方が求められる。
- ・ パークセンターの役割としては、冬でも使えるセミナーハウスなど、ある程度の大きさや人が集まる場は必要。子ども食堂や音楽会、読み聞かせなど様々な活用が考えられ、みんなで使える場が大切。
- ・ “情報の統一化”、パークセンターが情報を収集、発信する場としての活用も考えられる。例えば、人の紹介ができたり、外国人との交流イベントを行ったり、情報ネットワークで賑わいのある“使われる場”になる。ここに来れば、公園だけでなく、他の場所(例えば町内会)の情報も得られる場。

《人材、運営ノウハウ》

- ・ コーディネーターとなる中間支援組織が大切。
- ・ 中間支援組織はそこに入る“人”、コーディネーターが大切であり、公募で様々な専門家を集めたい。
- ・ ルールは最初から決め過ぎず、ある程度余裕のあるものとし、使いながら決めていく方が良い。
- ・ 例えば、パークセンター（中間支援組織）が企画し、テニスコートでの“子どもの体験会、講習会”や“恵み野中央公園大会(有料)”で行い、売り上げはパークセンター維持費などお金を作り出す。

《行政支援》

- ・ 中間支援組織の位置付けは大切であり、初めのうちから決めておく必要がある。
- ・ 市に対しても中間支援組織の必要性を理解してもらう。
- ・ 運営資金の提供が必要。最初のうちは手弁当という形になるかもしれない。

《恵み野スタイル》

- ・ “「ゆりかご」から「パラダイス(墓場)」”まで活用できる場、使える場でありたい。
- ・ 多くの人が良いと思う使い方や管理方法、恵庭・恵み野のスタイルを見つけたい。
- ・ 公園内の修繕を地域の人たちで直すことで、自分たちの公園という意識付けや、自分たちで考え、行動することを促したい。自ら参加することで主体的な考えが生まれる。

【B班：7名】**《現状の課題整理》****①行政の課題：**

- 草刈りがされていない、膝丈くらいまで伸びた雑草の中で子どもたちが遊んでいる。予算に限りはあると思うが、草刈りの頻度を増やすなど、維持管理を最低限行ってほしい。ボランティアに頼るのも一つの方法ではあるが、積極的な地域とそうではない地域とで、偏りが見られる。

②地域の課題：

- 気軽に相談できるような場がない。当事者になってはじめて情報を収集しようとするが、色々な勉強会は開催されているものの、横のつながりがない。情報の連携があれば、情報収集がしやすくなる。
- ボランティアでの花壇管理は、規模に対してボランティアの人数が少ない。
- 町内会にて出前講座を行っているが、ネットで調べて自己完結する方が多いようで、参加人数が少ない。

③地域の課題解決における取組事例

- 草刈りに関しては、管理しているまちづくり協同組合も160余りの公園を一斉に草刈りするのは限界があると思うため、自ら草刈り機の免許を取り、できる範囲での草刈りを行っている。
- 市では、花植えに関する花苗、プランター等の購入において1/2の助成制度がある。これを活用して町内会で花植えを行ったり、じょうろを傍において誰でも自由に水やりできるようにしている。

《今後のあり方》

- 運営資金は必要で、集客の仕組みを考える必要がある。講義の中で紹介されていた、サンデーパークのような食に関する取り組みを参考にしたい。
- 中間支援組織が必要だと感じるが、経験がないため、いつ・誰が・どこで・何をするかといったことが思い浮かばない。まずは経験のある団体にリードしてもらう必要があり、そこに得意分野を持つ人たちが集まってサポートするような体制が良い。
- 事例とは人口規模が異なるため、恵庭規模に落とし込んで考える必要がある。
- 参加したい人が気軽に集まれるようなボランティア活動を継続して行いたい。
- 健康案内所のような、ここに行けばたくさんの情報を得られるというような機能が、パークセンターにあると良い。一方で、町内会館もそういった役割を持っているため、全てをパークセンターに集約する場合は、町内会館の役割を同時に考える必要がある。
- 恵み野中央公園だけが良くなればいいといった考えではなく、将来的には地域全体の活性化という視点で考えることが大事。
- パークセンターに持たせる機能として、充実させることによって中途半端なものにならないように機能や役割を整理する必要がある。

《運営体制・仕組み》

- 「市」と「関係団体」との調整役として「中間支援組織」が間に入るような体制が良い。
- 関係団体同士、横の繋がりを持たせると中間支援組織の関与しないところでの活動が発生してしまうため、中間支援組織を介した体制が良いと考える。
- 管理対象公園としては、中途半端にならないよう、まずは恵み野中央公園に限定して行った方が良い。
- 中間支援組織や関係団体は、市外の企業や団体よりも市内の企業や団体に関わっていただき、継続した雇用を生んでいきたい。
- 関係団体としては、まちづくり協同組合、商店会、町内会、地域ボランティアの他、ソフト管理を得意とする団体や、まちづくり協同組合の他にハード管理を行う団体があつても良い。
- まちづくり協同組合で今以上の管理が難しければ、恵み野中央公園のみ別のハード管理をする企業や団体を個別で設置することも考えられる。

【C班：6名】

《恵庭市の特性》

- 問題点：人材はいるが高齢化が懸念される。また、まとめ役となる人がいない。

《継続する為の「恵庭スタイル」》

- 人材はいるため、横の繋がりを活かす必要あり。
- 学校行事での遠足などを利用し、花壇への植栽や手入れをしてもらう。

《行政からの「支援」》

- お金は出すぐれ、口は出さないようなバックアップ体制が必要。
- 専属スタッフとして3人から5人は必要。

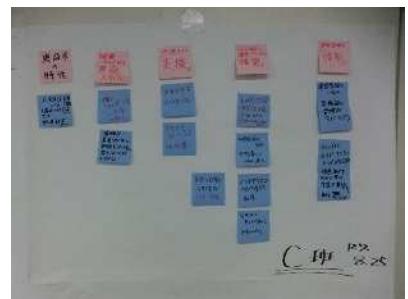
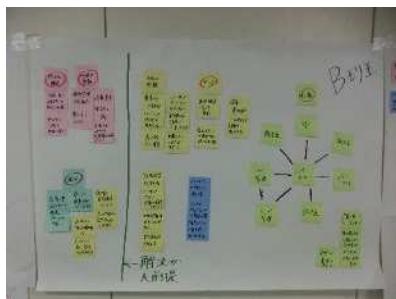
《人材の育成と運営ノウハウの「構築」》

- 恵み野公園運営協議会の発足（まち組、図書館、学校、町内会、ハイテク、その他）
- 中間支援は独立させ、他機関とは協力・連携を行う必要がある。
- 多世代の声を聞き続ける仕組みづくりが必要。
- 自立を目指す人材育成が重要。人材と支援が必要。

《運営管理の「体制」》

- ハイテクノロジー、北海道エコ・動物自然専門学校に全部任せることはどうか。
- 現状、各施設の管理は個別で対応している状況のため、運営管理を一本化する。
アメリカのネイバーフッド（住民自ら考えて、まちづくりを行っていく手法）のような仕組みづくりが理想。

各班の話し合いと発表の様子



○NPO birth 佐藤氏の講評

A班：ゆりかごから墓場までというキーワードは、まさに今考えないといけないこと。パークリフマガジンをホームページで公表しているが、公園はライフスタイルにおいて、公園に寄り添う暮らしの場、各世代に応えられるような場として考えることができる。そういう運営を行っていくための体制はどのようなものかを考えていければ良いと思う。

B班：海外には中間支援組織が数多くある。中間支援組織がいることにより、ボランティアの方々が安心して取り組めている。個人・団体・アメリカでは収容所等様々なボランティアが活動している。その活動を中間支援組織がフォローアップしていくことによって、若い世代が次々に入ってきており、次世代に繋がるような仕組みづくりの参考となる。コーディネーターがいれば良いというものではなく、2人3人では難しい。まずは繋いでいくという点で隙間をバックアップするような仕組みづくりを進めていく必要がある。

C班：恵庭スタイルを考えることは大切。ユニバーサルスタイルという考えは昔からあるが、令和時代の新たな形で考えることも大切。ネイバーフットデザイン（近くに暮らす人々の間に“ゆるやかなつながり”をデザインし、いざという時に助け合える関係性と仕組みづくりを通じて、都市における様々な課題を解決していくけるようにすること）という考え方も生まれており、もともと日本人が持つ郷土の精神というものが令和の時代になって新たな形としてネイバーフットデザインという考えが生まれた、その街でのやり方を見つけたい。

総評：講義の中で公園には中間支援組織が必要というように聞こえてしまったかもしれないが、川崎市は指定管理者ではなく、愛護会（町内会や自治会等を中心とした市民団体）が市と管理をしている。愛護会は、高齢化が進んでいくことが課題になっている。一方で、若い人たちがもっと公園を使いたいという声もあり、気軽に公園を活用できるように、LINEで相談できるシステム（公園活動サポート窓口）を作っている。現場に常駐しなくても、その時その時でフォローアップできるような体制で運営しており、川崎市スタイルと言える。このように、中間支援には色々な関与の仕方があり、中間支援組織の団体が核となり関与するパターンもあれば、その場にいなくても外からカバーするパターンもある。その公園や地域の特性を踏まえて、話を深めていっていただけたらと思う。

質疑応答：行政として中間支援組織の運営にあたっては、実績がない状況から先に進めていくために、まず何から取り組んでいく必要があるか、ご教示いただきたい。

現在のように中間支援組織が認知される前は、中間支援組織という業務に対して予算を付けてくれる自治体はなかった。きっかけとなったのは、指定管理者として公園の拠点運営に携わり、中間支援をその業務の中で行い、実績を積み重ねていった。やがて、行政側も中間支援組織が必要という評価に変わっていき、現在は仕様書や公募の中で中間支援組織の設置について、要件として記載されるようになってきた。中間支援組織がない場合、最初は中間支援組織に代わるサポート窓口のようなウェブサイトから始めて良いと思う。あさはた緑地の事例は、恵み野中央公園に似ていると感じている。あさはた緑地は、地域に中間支援組織がなかったが、SDGsに取り組みたくてNPO法人を設立していた方がいた。その方を中心として、足りないところ補う会社や団体と組んで新たな会社を設立し、現在は指定管理者として関わっている。キーパーソンを見つけるのが大事で、恵庭にはそのような方々が多くいると感じる。また、運営協議会は非常に重要で、何らかの法人がないと行政の仕事は受けられない。まだ幸いにも時間があるので、運営の方法、恵庭スタイルを作っていただけたらと思う。

○第2回ワークショップのまとめ

第2回ワークショップでは、東京都における中間支援組織の活動事例の講義を受け、様々な中間支援組織の体制があることを共有し、パークセンターを中心とした公園の運営管理方法などの議論を行った。

第1回ワークショップにおいて、中間支援組織が必要という意見が各班から挙げられていたが、第2回ワークショップでは、中間支援組織を恵み野中央公園で実現するための課題や考えられる体制や仕組みづくりについて、より踏み込んだ話し合いが行われた。

中間支援組織を導入するにあたり、行政に求めるものとしては、中間支援組織の必要性を理解してもらうことと、資金面での支援等が挙げられた。市民として取り組めるものとしては、イベントによる集客と物販による資金確保、継続したボランティア活動の取組等が挙げられた。

中間支援組織の担う役割としては、独立して活動している団体や個々に活躍されている市民、行政等との横の繋がりを強化するとともに、調整役として情報の一元化する役割が挙げられた。

最終回となる第3回ワークショップでは、市民参加型の運営管理に向けて、核となる人材候補の検討を進めつつ、これらを支援すべく体制の骨格づくりについて話し合いを進めるとともに、パークセンターの計画案については、外観イメージや設備計画など、より詳細な仕様について提示し、その内容について共有することとする。

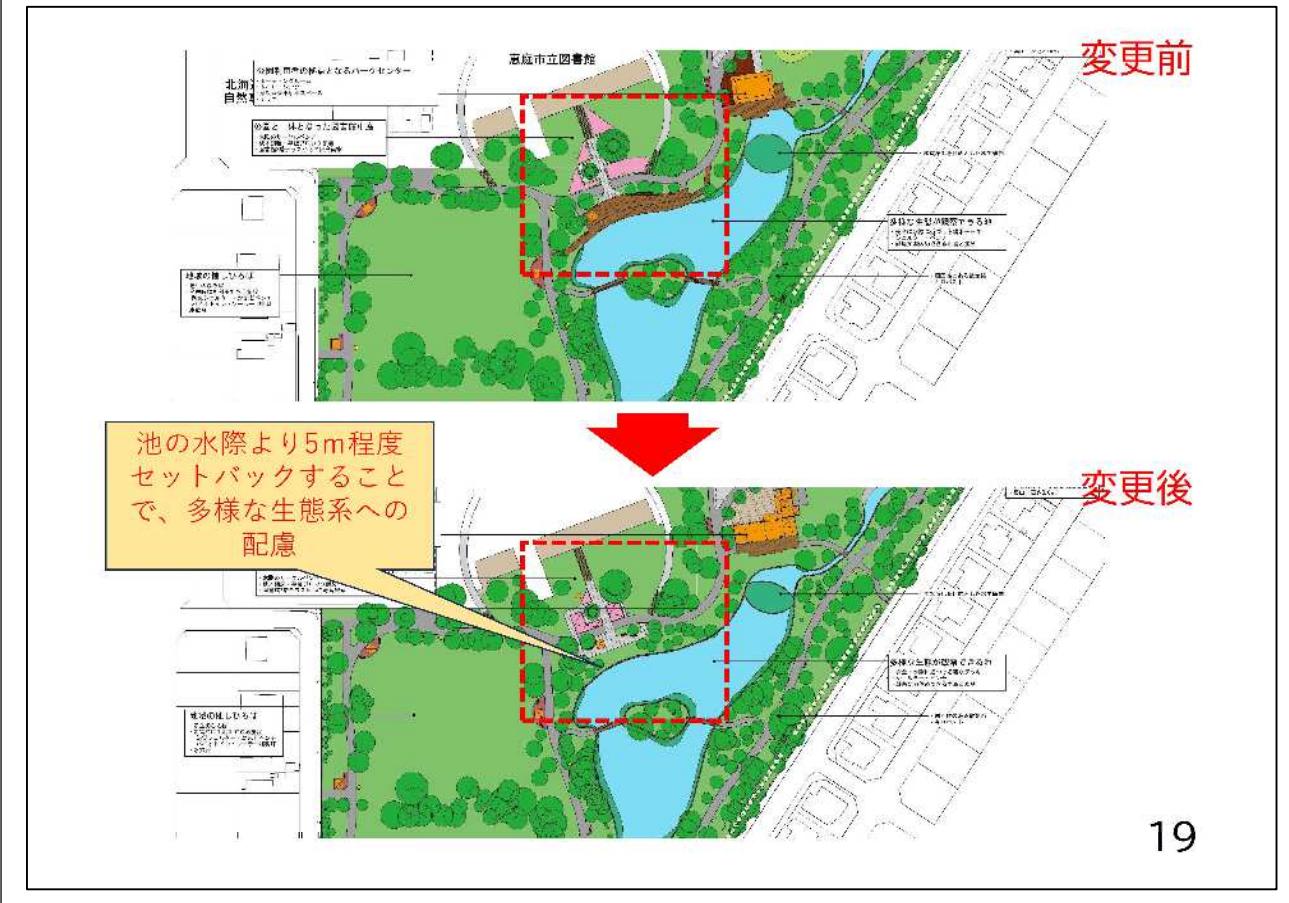
2-4 第3回ワークショップ

図表 2-12 第3回ワークショップ概要

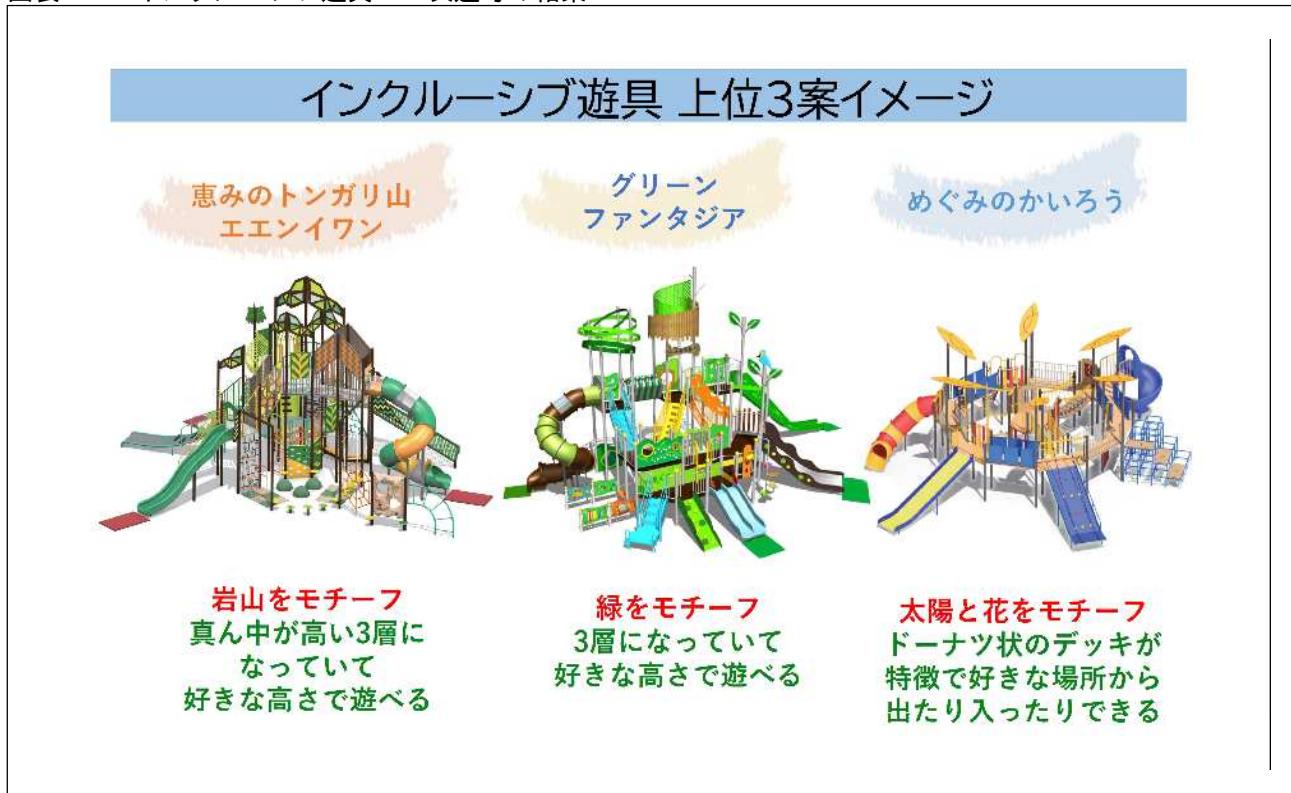
第3回ワークショップ	
開催日時	令和7年10月29日 10:00～12:30(2.5時間)
開催場所	恵庭リサーチ・ビジネスパークセンタービル
参加人数	恵庭市役所：5名 環境緑地研究所：6名 ワークショップ参加者：12名 傍聴者：数名
開催目的	・パークセンター完成イメージの共有 ・市民参加型の運営管理に向けて②
提示資料	・しおり (開催目的、改修スケジュール、施設改修計画(案)、パークセンター計画案、インクルーシブ遊具) ・しおり別紙(前回のふりかえり)

第3回ワークショップでは、第2回ワークショップの振り返りと、恵み野中央公園改修計画案の一部見直し内容およびインクルーシブ遊具のアンケート状況の報告、パークセンター完成イメージの共有を行いました。その後、中間支援組織の設立に向けた議論のポイントおよび行政側の課題に対する取り組み状況について説明を行い、各グループにて話し合いを行いました。

図表 2-13 変更内容比較図



図表 2-14 インクルーシブ遊具 一次選考の結果



図表 2-15 第 3 回ワークショップの話し合いの内容-1

② 本日の話し合いの内容について

☆ 前回までの話し合いで挙げられた課題

【地域・人材】

- 各分野で活動する人や団体はいるが、横のつながりが乏しい
→各々をつなぐ人材(組織)が必要
- 活動されている人たちの高齢化
→20年後、30年後を見据え、次世代を担う人材の育成
- 恵庭市の規模や地域性に合わせた運営組織を検討
→“恵庭スタイル”的構築

【行政】

- 有償化による支援体制
- 中間支援組織との契約締結に至るまでの細部条件整理

図表 2-16 第 3 回ワークショップの話し合いの内容-2

② 本日の話し合いの内容について

① 今後、恵庭市の規模に即した“**恵庭スタイル**”中間支援組織の設置を考えていく場合、どの様なメンバー・団体が関わっていくのが良いのか？
中央公園を取り巻く環境を踏まえて、メンバー・団体のピックアップを行います。

25

図表 2-17 第 3 回ワークショップの話し合いの内容-3

② 本日の話し合いの内容について

② 中間支援組織を設置した場合、どの様な体制が望ましいのかを考えます。

<p>独立運営型</p> <p>メリット ・地域要望に対して柔軟で迅速な対応を進めやすい</p>	<p>コンソーシアム型</p> <p>メリット ・維持管理業務との連携が図りやすい</p>
--	---

※コンソーシアム～共通の目的を持つ複数の組織が協力するための共同体

27

第3回ワークショップで挙げられた主な意見について以下に示す。

【A班：4名】

《関係する団体》

- ・ 商店街、パークレンジャー、まちスポ、学校、商工会議所、動物の専門学校、花関係、ブレーパーク、ラジオが考えられる。
- ・若い世代が必要。
- ・緑や環境、教育(学校や図書館等)との繋がりも重要、これまで内倉さんが繋いでいた。
- ・素人の集まりではなく、専門家の関与が必要。

《担う機能》

- ・行政と同じ立場で活動する。
- ・教育関係との連携。
- ・デジタルやラジオ、掲示板などによる情報の受発信が大切。
- ・町内会との連携。
- ・自分たちで稼ぐ仕組みづくり。
- ・芝刈り範囲をまち組に任せるのではなく、刈る刈らないを利用者目線で考えたい。(環境、生態系などの視点から)
- ・樹名板を設置して、緑に意識を向けるような仕組みづくりが必要。

《現指定管理者との関わり》

- ・意見を出して、実行していくことが大切。ソフト面を考慮した管理などでは、指導および管理ができる立場。

《パークセンターの仕様》

- ・高齢者のいこいの場とコミュニティの場にしたい。
- ・屋上は車いす利用者も上がれるような仕様にしてほしい。
- ・太陽光パネルは壁面にも設置して、発電量を増やすことはどうか。
- ・授乳室の場所が使いにくい。
- ・防犯のため、女子トイレを奥、男子トイレを手前にしてほしい。
- ・情報共有のための掲示板がほしい。
- ・外に手洗いができるような場所がほしい。(ガーデンや自然活動後、手洗い等して入るために、野菜なども外で洗える)
- ・調理をしたいため、給湯室ではなくキッチンを設けてほしい。ガーデンで育てた野菜を調理する活動を行いたい。扉もほしい。
- ・福祉・防災機能を持つ施設。

《中間支援組織の運営等について》

- ・中間支援組織という言葉がわかりにくいため、わかりやすいネーミングとしたい。
- ・中間支援組織は最低3人必要。全ての世代に対応するには様々な世代、タイプなど3人は必要。
- ・運営は「独立運営型」が良いのではないか。
- ・様々な独自活動や火気や水なども園内で使える許可なども出せる組織。

《その他》

- ・すべての世代に配慮、憩える公園。
- ・四季を感じられるイベント等計画していきたい。
- ・自然を生かした利用が大切(散歩や散策、自然観察など)。

【B班：4名】**《運営》**

- ・ 職員は3人以上ないとNPO活動は難しい。
- ・ コンソーシアム型の方が動きやすい。
- ・ 指定管理者の一部として活動する方が動きやすい。
- ・ 中間支援組織の規模で運営体制は変わるものではないか。

《情報》

- ・ 市内のガイドコンシェルジュ（個人対応できるような）が、鳥や花、様々な名所を案内するような仕組み。
- ・ 恵み野中央公園ガイドブックを作る。
- ・ 花に詳しい人、鳥に詳しい人などの分野ごとに得意とするメンバーリストを作成し、連絡が取れるようにする。
- ・ 市内の情報発信をする団体の配置。
- ・ 恵庭市内の公園ガイド（ガイドは有料）。

《教育》

- ・ 教育、学校行事の開催、学校関連のイベントをまとめる団体。
- ・ 1泊の宿泊体験ツアーの実施。

《花・鳥など》

- ・ 恵庭市外の人にも来てもらえるようなイベントの実施。
- ・ 個人宅の庭を名所にしたツアーの実施。
- ・ 鳥、花などを映像で見れるような写真などの活動を実施。
- ・ 花の綺麗なポイントを公園で教えてもらえる仕組みがあると良い。

《その他》

- ・ 町内会と中間支援組織がタッグを組み、これまでの町内会活動をグレードアップしたようなイベントを実施。
- ・ 日ハムの選手を呼んで行う少年野球教室の実施。
- ・ 公園利用の苦情対応が必要となる。

【C班：4名】

《組織形態》

- 組織ありきで考えると失敗する。イメージとしては、実際に活動しながら、適切なスタイルを模索していく動きになる。がちがちにルールや仕組みを固定された状態でスタートするのは現実的ではない。
- 形態としては3重の円をイメージしており、中心の円（①）には3人以上のキーマンとなるスタッフが必要。一番良いのは土地感のある地域の方が理想で、情報を発信、収集できる人。利用者とのフィルター役となる。外側の円（③）には各分野に特化した専門家、学校や幼稚園、花関係、福祉関係などの団体が関係してくる。自然発生的な繋がりが理想。これを繋ぐ中間の円（②）には、それぞれの関係者と板挟みになる立場であり、非常に重要なポジションとなる。中間支援を理解している人で、かつ、中心のスタッフや事情をわかっている人が良い。また、新しい風を吹かせるような、①と接点がない③の関係者を見つけてくることや、①からのむちやぶりを③にむちやぶりできるのも大事。抱え込むようになると組織の破綻に繋がる。
- 組織を考える際は、①と③に関わるメンバーを先に決める必要がある。その後、②に適切なメンバーを考える。外側を先に固めてしまうと、①の実働部隊が苦しくなる。
- 将来的に次世代へとつないでいくためには、地元民の繋がりを考える必要がある。家族の関係者、友達、兄弟など、人脈のネットワークを通じて、中間支援組織で将来活躍したいと思ってもらえるような組織づくりが大事。

《組織づくりよりも人探し》

- 中間支援組織と言っても人の集まりである以上、メンバー（キーマン）探しは最優先事項である。
- まちスポにおいては、まちスポという団体宛ではなく、個人宛に相談が来ることが非常に多い。あの人なら話せる、あの人聞いてほしいと思われる人材探し。

《来園動機を増やすきっかけづくり》

- ラジオ体操の日や太極拳の日など、何かしらイベントが実施されているのが理想。
- 散歩利用が多いことから、歩数がポイントになって、ポイントを使って特典をもらうなど、気軽に、楽しんで参加できるようなイベントが良い。
- 利益ばかりを優先して考えてしまうと、どうしても外から人を呼ぶことを重要視してしまう。地元が置き去りにならないようなバランスが大切。

《スケジュール》

- 中間支援組織として本格的に運営を開始する前に、少なくともトライアル期間として1年は必要。その後、試行錯誤を繰り返しながら、恵庭スタイルを模索していく期間が10年。この間、成果が出なくとも支えてくれる行政支援が不可欠。まちスポでも現在の体制が確立するまでに10年要した。

《パークセンター》

- 誰でも気軽に来れる施設である必要がある。
- 食育の活動を行うためにキッチンが必要。あるかないかでガーデンの使い方が変わる。
- 活動を広げていくことを考えると、女性トイレのブース数は増やした方が良い。

各班の話し合いと発表の様子



○第3回ワークショップのまとめ

第3回ワークショップでは、第2回に続き中間支援組織の設立に向けた体制や関係団体について議論した。

中間支援組織の中心となる職員は、最低でも3人以上は必要ということが共通意見として挙げられた。体制としては、独立運営型およびコンソーシアム型とに意見が分かれたが、組織の規模によって適正な体制は変わるのでないかという意見もあった。

関係する団体として、学校や商店会、花や鳥関係の団体などが挙げられ、共通意見として専門家のような各分野に特化したメンバーの関与が必要という意見が挙げられた。

その他、パークセンターに関する内容として、食育体験の一環として利用できるキッチン（調理スペース）の設置や、男女トイレの位置変更に関する要望があった。

今年度のワークショップは以上となるが、次年度以降においても中間支援組織の設立に向けた、継続的な話し合いを実施する予定である。